

『ぱっぱ』

紅緒子

9997 文字

「あらすじ」

34歳のOLりなはゴミ屋敷で、仕事も恋愛もぱっとせず荒んだ日々を送っていた。

何でもぱっぱと片づける祖母が生きていた頃は、隅々までキレイな自慢の我が家だったのに……

りなは片づけが得意な女友達と共に、祖母と暮らしていた頃の様な美しさを取り戻すため、ゴミと真正面から戦う決意をする。

子どもの頃、おばあちゃんの家に入った瞬間のキレイな匂いが忘れられない。手入れされた花壇を抜けて玄関に入ると、壁にかけられた花と絵画に迎えられ、居間には大人数で料理を食べられる立派なテーブルが置かれている。窓も障子もぴかぴかで、床の間の掛け軸は季節によって変えられていた。私は清々しい香りのする部屋で、祖母の隣に太陽の香りをさせたふかふかのふとんを敷き眠るのだ。

キレイ好きの祖母はもちろん家事も大得意で、夏休みやお正月に私が泊まる日には大好物のぜんまいを煮ておいてくれた。いつ食べても美味しい煮物、天ぷら、フライ、ごちそうが並んだ食卓を前に、私は満開の笑顔で箸を握っていた。祖母は裁縫も得意で、母が使わなくなったスカーフで、物語の主人公が着ているような色とりどりのワンピースを完成させた。私は祖母の家にいる時は、まちがいなく一国のお姫様だった。あの頃みたいな日々を幸せと言うのだろう。祖母は私をリナとは呼ばず「リーちゃん」と呼んでいた。リーちゃんは未来なんかちっとも怖くなくて、きょうは何をして遊ぼうか、どのおやつを食べようか、何のテレビを見ようかという幸せな問題しかなかった。

ただし、しっかり者の母親に育てられた子供は逆にだらしなくなる場合が多いらしい。我が家は小さな頃からごみ屋敷だった。母だけでなく、父も片づけが苦手で、そこら中に洋服がちらばり、書類が山積みになされ、捨てられないものであふれていた。私も両親と同じように散らかし放題にしていた。床に重ねておいた参考書の下から小さいミミズのような虫を大量に発見してからしばらくは、血走った眼で整理整頓を試みたけれど、何をどうすればいいのかさっぱりわからず、すぐにあきらめた。万年床の周りには読みかけの小説やマンガ、何度か着たものの汚れがひどくないので洗濯をせずに置きっ放しの洋服の山、筆記用具、おしゃれなデザインの紙袋やチラシ。机の上にはパソコン、鏡、化粧道具、飲みかけのコップ。少女の頃からOLになった現在に至るまで全く変わらないごちゃごちゃとした暮らしだ。

だけど祖母がいた頃、自分の家じゃないみたいに部屋がキレイになることが時々あった。たまに遊びに来て、祖母が掃除をしてくれるのだ。祖母の口癖は「ぱっぱと」で、私のようになんでも後回しにせずいつもきちんとしている人だった。中学生までは助かるばかりだったが、高校生になってからは、ことわりなく部屋のモノを勝手に移動させる祖母を犯罪者のように扱っていた。子供の頃はあんなにありがたかった祖母のしてくれる全てが、すっかり当たり前になってしまっていたのだ。祖母が勝手にやっているだけなので、感謝する必要がない。祖母は暇だから、家のことでもしていればいい。そもそも祖母はキレイ好きというよりも、A型で四角四面にやらないと気が済まない性質だから、何でもきちっと並べたいだけの神経病のようなものと本気で思っていた。

私が就職したタイミングで、75歳を過ぎた祖母の体を慮り、私と両親は祖母の家に移り住むことになった。社会人になったばかりの私は、大学時代を気ままに過ごしすぎていたため、突然の生活の変化にすこぶるご機嫌ななめだった。ついこの前までは専門の日本文学に没頭し、就職の役に立たない小説を読んだり書いたりしては、現実にはない夢の世界にひたっていたのだ。リアルな私はわがままな箱入り娘で、彼氏も親友もなく、親に依存してえらそうにしているだけだけど、小説の世界では何にだってなれた。それなのに就職したら、まるで軍隊か刑務所にでも入ったように規則だらけ。地味な制服を着てストッキングで足を蒸らし、伝票に数字を打ち込み、ただただまちがいのないよう神経をすり減らす。親族経営の中小企業しか入れなかったものだから、女性社員は出世の見込みはまるでなく、お茶くみと電話番をしながら、数字とにらめっこする日々だった。

なのに、祖母は一日中居間でぼんやりし、テレビのクイズ番組に真剣に答え、せんべいやクッキーやら、間食ばかりしている。

私の鬱憤は祖母へと向かい、会話をしなくなった。祖母をスーパーや病院に車で連れて行くことを頑なに拒否した。テレビのリモコンを隠して、祖母が見たがる時代劇や2時間ドラマを見せず、大して興味が持てない若者向けのバラエティやドラマを大音量で流しふてくされていた。

次第に祖母は先に天国に行ったおじいちゃんに会いたがるようになった。ベッドから起きるのを嫌がり、居眠りする時間が増えた。台所に立つのも嫌がり、まるで私のように、だらけてばかりの人間になってしまった。

私は祖母にかつての様にぱっぱと行動するようにいつも注意をしていた。

「あんたらも年をとったらわかるよ。もうなんにもしたくないんだよ」

我が家で一番の働き者だった祖母を知っているから、そんなことを言うなんて許せない。居眠りしようものなら、祖母を乱暴に揺さぶって目覚めさせる。かといって、目を開けた祖母の話し相手になるわけではない。

そうしてある日、祖母が定期健診で病院に行って、そのまま入院することになった時に、ようやく自分の大失敗に気づいた。

祖母は入院するとすぐに弱っていった。自分で食べることができなくなり、胃瘻の手術を受けることになった。胃に穴を開けて、栄養素を流し込むのだ。

手術の前日、私は祖母に自分が後悔しないように話しかけた。

「おばあちゃん、私のこと好き？」

祖母はもうほとんど話せなくなっていたから「好き」とは言ってくれなかったけれど、頷いてくれた。

祖母は手術室に行く時、私と母に向かって小さく手を振った。私達に本当にさよならをするみたいな、この世とのお別れのようなバイバイだった。

胃瘻の手術自体は上手く行ったけれど、体調が回復することはなく、まさに老衰して息をひきとった。

入院中に毎日お見舞いに行き、祖母を励ましてこっちに引っ張ればよかったのだろうか。だけど、家に祖母が戻ってきても、きっとまた八つ当たりしていただろう。

祖母が死んでからの我が家は荒れ放題になった。祖母はいるだけで、我が家の守り神のようだったのだ。もう片づけはほとんどしていなかったはずなのに、祖母がいなくなった家の中はどんどん汚れていく。ここも、あそこも全部磨いてくれていたんだね。廃墟のように埃がつもっていく。テレビの上、床の隅、壁も窓もしっかりと確認できるほど、灰色の埃がつもっている。破れたままの障子は黄ばみ、開いた穴がどんどん広がっていく。開かれないタンスの中には段ボールが山積みで誰も中身が何か知らない。部屋中に物が置きっぱなしになって、その上に更に物が置かれて、まるで泥棒が入ったみたいな我が家。ここは本当に人が住む家なのか。祖母の遺影に供えた榊はひからびさせてばかりで、庭の花もほとんど枯れてしまった。

おしゃれをして外に出かけても、家の中がくちゃくちゃなのが後ろめたくて、自分がひどく不潔に思える。誰のことも呼べない家。どこに何があるかわからないし、使っていない物ばかり積んであるのだから、捨てればいいのに、捨てられない。

私は家の中にいる自分と、外にいる自分を分けて生きるようになった。年相応の恋愛をしている時も、何か二重生活を送っているような背徳感がいつもあった。

このままではいけない。両親はもう60歳を過ぎ、今から人生を変えるのは無理だろう。若い私がこの家をキレイにしないと、家畜の住みかのような息苦しさから一生解放されない。

もう記憶からどんどん薄れていく祖母のやさしい笑顔を思い出す。

パッと花が咲くような晴れやかな顔で笑っている遺影の写真。いとこの結婚式に出席するため、髪をセットしお化粧をして薄紫の着物を身にまとい、よそいきの顔で微笑んでいる。集合写真を拡大したので、かなりピンぼけの写真だけど、老眼が進んだ母は気に入っているようだ。こういう笑顔は死ぬ間際には見ることができなかった。この笑顔を见ていると、病院のベッドの上で無理やり言わせたように、娘や孫の私のことを全て許して見守ってくれていると信じたくなる。

祖母に当たり散らしたように、次第に両親を怒鳴るようになった。汚い環境は人間の心まで荒らすの
だろう。親子でお互いに口喧嘩しあって、家にいても気が休まらない。

仕事は誰でもできるOLだし、恋愛ではいい男はつかまらない。こんな女じゃ当然だ。自分が男でも私
を選ばないだろう。

片づけのカルスマみたいな人の本を読んでみても、心がときめく片づけなんてとてもできない。ゴミと向
き合ってときめくわけがない。

勤めてもう12年になる会社で、34歳になった私はお局扱いだ。地方の中小企業らしく、パワハラもセ
クハラもサービス残業も当たり前の会社だけど、上司の目を盗む術を十分に体得している私にとっては、
もはやぬるま湯だ。快活に働くことは求められず、とりあえず自分のやるべきことを他の社員と協力せず、
ただやっておけばいいだけの営業事務だ。営業マンとは業務上の会話のみだし、仲の良い社員もいな
いし、本当に出会いがない。かといって、辞める理由はないし、大した仕事でもないのに、定年まで勤め
上げてしまいそうだ。

女は35歳を過ぎたら婚活では更に苦勞するようだから、そろそろ本格的に婚活パーティーやら見合い
やらをしなければいけないのだろうけれど、実家暮らしで貯金を毎月できる身分なのがまた良くないのだ
ろう。両親が死んでも、残してくれた家と土地を売ればなんとか老人ホームに入れそうだと思うと、男に頼
るための結婚という選択肢がない。

それでも結婚したい気持ちは人並みにあるので、運氣アップを期待して、祖母が亡くなってから初め
て墓参りに行ってみた。毎日遺影を見て悔いているし、祖母に会いたいと心のどこかで願っているもの
の、根がずぼらな私達は墓参りすらまともにできていなかった。両親を誘ったが、腰痛だの暑いだのと言
うので、一人で墓地まで出かけた。墓の周りは雑草が伸び放題で、墓地の事務所から鎌を借りて刈らな
くてはいけないほどだった。お墓の中には祖母はいなくて、千の風になってそばにいてくれるのかもしれ
ないけれど、久々に会話ができたようでじんわりとしたものがこみあげた。

おばあちゃん、本当にごめんなさい。もう一度会いたいです。

祈っているのか、懺悔しているのか。蝉が鳴き始めた7月の太陽がまぶしい。

「これからは毎年夏に来るね」とは言えなかった。

せせこましい日々の悩みから解放されるのは通勤の車中ぐらいだ。好きな曲を大音量でかけてドライ
ブする時間が、私にとって唯一のオアシスになっている。信号待ちのタイミングでCDを入れ替えようとし
た時、FM ラジオから和風美人塾のお知らせが流れてきた。和風美人塾は独身女性が対象の料理教室
で、定番煮物の美味しい作り方を学べる上に、地物野菜のプレゼントもあるという。参加は無料で、8月
のお盆休みの開催だった。どうせ連休は家でぐだぐだするだけだし、普段とちがったことを何かしてみたい
衝動にかられて、早速申し込んでいた。

夏休み初日の午前中、ファッションビルの一隅で行われた和風美人塾には、おしゃれなエプロンをし
た女子力が高い人ばかりが集まっていた。髪はつややかな茶髪で、スカート率が高い。

壁際の隅のテーブルに、私と同じジーンズの女性がいたので、隣の席に座る。教室でもこんな風にす
みっこだったことが思い出される。

同じ目立たないタイプなのに、彼女は平然としていて、会場の雰囲気を楽しんでいる感じだ。ゆっくりと
教室の中を見渡し、窓から見えるただのビル街をまぶしそうに眺めている。

地味な彼女と目が合うと「こんにちは」と微笑んでくれた。挨拶を返したところで、着物に割烹着姿の女
性講師が入ってきて、料理教室がはじまった。筑前煮と煮魚を作ることになり、隣の席の人とペアを組ん

で材料を切り分けたり、同じ鍋でだしをとったりする。彼女が手際よくどンドンやってくれるので、私はお母さんの料理をぼけっと見ている子どものようになってしまう。いい匂いをさせて煮えはじめた料理が完成するのを、おなかをすかせて待ってしまっていた。

できあがった料理は定番のオフクロの味でありながら、だしがきいていてとても上品な仕上がりだ。行ったことはないけれど、料亭の味というのはこういうものなのだろうか。

「だしから作ると味に深みが出る上に、塩を加える量が減って塩分を抑えることができるから、健康にもいいんですよ。それと、男性の胃袋をつかむと良いと昔から言いますが、本当ですからね」

講師の古臭いセリフにしらけながらも、きっと真実なのだろうと思う。胃袋をつかみたい相手もいないのだから、私には関係ないことか。

それにしても、同じテーブルの彼女の食べっぷりはどうだ。一口一口かみしめ、瞳に星を浮かべて、ごはんをおかわりしている。

彼女につられて私もごはんをおかわりしようとする、「美味しいですよ」と言ってさつとよそってくれた。本当に気がきく感じのよい人だ。

「家でも作りますか」と訊ねてみると、「私は作っても食べてくれる人がいないんです」と意外な返事が来た。

「私もです。なんだか料理を習っても仕方がない感じで」

つい私も自虐的なことを言っていた。

「こういう教室にはよく参加しているんですか」と彼女に聞かれ、「いえ。初めてなんです」と答える。

「私も初めての参加なんです。よかったらまたいっしょに参加しませんか」

「あ、私はちょっとこういうのは向いていないみたいで」

「そうですか。とても気が合いそうな気がして、お友達になってほしかったんですけど」

学生時代でもこんなストレートに言われたことはない。同じ地味系の人だから確かにすごく話しやすいし、仲良くなれそうな気がする。

そのまま近くのカフェでお茶をすることにした。同じ34歳のヨシコさんは上司とそりが合わず長年勤めた会社を辞めてしまって、職探し中らしい。

「毎日暇でやる事が何もないの。だからつい掃除ばかりしちゃって」

「すごい。私も家では暇だけど、掃除なんかしないや」

「じゃあ、私がりーちゃんの部屋の掃除しようか」

「えー。お願いしたい！ ってゆうか、そのりーちゃんって呼び方、なつかしいな。昔、祖母がそう呼んでくれていたんだ。じゃあ、私はヨシコさんのことをよっちゃんって呼ぶね。なんか学生の頃に戻ったみたいでいいね」

「うん、うん」

よっちゃんといるとなぜだろう。すごく安らぐ。ずっと昔から友だちだったみたいで、こんなことを言ったら変に思われなにかとか、言葉を選ばずに何でも話してしまう。会話がとぎれてしんとなっても、隣でぼんやりと目の前の景色を眺めているだけでよい気持ちになる。

「ねえ、明日は何しているの？」

「うーん。きょう出かけたから、明日は家でごろごろしようかな。まあ、ごろごろっていても、本当に家が汚すぎて、気が滅入ってくるんだけどね」

「そっか。じゃあ、私が手伝いに行こうか」

「いや。来てほしいけど、うちが汚すぎてたぶん引くよ。嫌われちゃうと思う。よくテレビで見るような、ごみ屋敷なんだよ」

「実は私もそうだったの。写真、見る？」

よっちゃんのスマホを見せてもらおうと、わが家そっくりなごみ屋敷の写真が出てきた。

「え。うわ。私もこんな感じなの」

「私もそうだったんだけど、掃除がんばったの」

「よっちゃんはすごいね。私も家をキレイにしたいけど、絶対に無理だ」

「ねえ、本当に手伝いに行くよ。明日は晴れだし、お掃除日和だもん。一気にやっつけちゃおう」

「無理だよ。すごい量だもん」

「大丈夫だよ。二人でがんばろう。私は一人で全部掃除してつらかったよ。誰か手伝ってくれたらいいのって思ったけど、そんな人は誰もいないし、自分でするしかなくて、片づけても片づけても終わらなくて」

「わかるよ」

「私はね、ほら、仕事をやめたでしょう。それで家にいづらくなって、親に働かない代わりに家事を任されて、一人でがんばったの。それで一段落したところで、料理教室に来てみたらりーちゃんに会えたの。これはもう運命よ。だから一緒に家をキレイにしようよ」

よっちゃんとの奇跡みたいな出会いをかみしめる。

ごみ屋敷に友人を入れるとなると、親が反対しそうなのでいっさい言わずに強行することにした。もう今日を逃したらチャンスがないような強迫感があつた。

父と母には一万円札を渡して都内のホテルバイキングに行かせた。移動時間を考慮すると絶対に帰りは夜になるし大丈夫だ。午前10時に近くのホームセンターでよっちゃんと待ち合わせする。

なんとよっちゃんは先にホームセンターでおすすめのグッズを集めてくれていた。収納用のクリアケースが15個と除菌スプレー、床磨き用のワックスや洗剤、埃対策のマスクと透明のメガネだ。合計すると一万を超えたが、せっかく選んでくれたのでカードで支払う。

「15個もいるかな」

「ちょうどいいよ。これぐらいあつた方がいい」

よっちゃんの言葉は確信に満ちていて、掃除の女神の支持に従う。これから体力を消耗することになるので、ピザで腹ごしらえすることにした。食べながら恋愛の話で盛り上がる。

「よっちゃんはどんな人がタイプなの？」

「そうね、おじいちゃんみたいな渋い系ね。それに、ハンサムな人がいいわ」

「渋くてハンサムな年上の人か。おじいちゃんは年が行き過ぎだけど、そういう人って理想だよ。でも私なんかじゃ無理だな」

「そんなことないよ。りーちゃんには絶対カッコいい人と結婚して欲しい」

「無理だよ。私なんて」

「りーちゃんはとっってもかわいいし、いい子だし、いい人があられるよ」

「よっちゃんこそだよ。よっちゃんみたいないい子に会つたことないよ。私が男だったら絶対によっちゃんと結婚する」

「ありがとう。すごく嬉しいよ」

にこやかに微笑むよっちゃんは本当に理想の花嫁だ。穏やかな昼下がり。なんていい夏休みなんだろう。

まずは押入れを占領しているふとんを引っ張り出す。

「このお布団さ、おばあちゃんが大事にしていた羽毛布団なの。捨てるなんてもったいないよ」

「だって外に干してもどうにもならないぐらいにカビがすごいよ。衛生的に良くないよ」

「でも、高級布団なんだよ」

よっちゃんは慰めるように私を見ていた。ごみなのだ。いくら祖母が大枚をはたいて買った宝物でも、残された者がきちんと管理せず腐らせてしまった以上、なんの役にも立たない邪魔な物体なのだ。

ごみが有料化になったので、ひとつ捨てるのに400円もかかる。5枚もあるから二千元だ。だけど私のせいでおばあちゃんがいなくなり、掃除を放棄しつつけたこの十年分の経費だと思えば適正な価格だろう。

ふとんを取り出した押入れの中に洗剤と除菌スプレーをまく。ぞうきんで拭いたらあっという間に茶色くなった。今まで掃除機をかけるぐらいで、家具や壁をぞうきんでなんて拭いたことがなかった。祖母が元気だった頃は隅々までいい匂いに満ちていたのは、きちんとぞうきんがけをしていたからなのだろうか。

次に要らない本をまとめる。祖母の家計簿や女学校時代の冊子がでてきた。遺言がはさまっていないかと開いてみたけど、ただの黄ばんだ紙の束だった。家計簿には達筆で日々の収支が書かれていて、地に足をつけて暮らしてきた昭和の人の面影が漂っている。

祖母の誕生日にあげたベージュのチェックのシャツやヒョウ柄のバックなど、洋服もたくさん出てきた。ずっと昔のことなのに、身だしなみを整えて、少女のようにはにかむ祖母の顔が昨日のことみたいに目に浮かぶ。

心の中で謝りながら捨てる物と残す物を仕分けする。

「どうしよう。中々捨てられない。また使うかもしれないでしょう」

「いつか、もしかしたら使うかもしれないって思う物はぱっぱと捨てよう。今、必要な物だけにしよう」

よっちゃんがそばでにこにこしながら、時に真剣な顔でてきぱき働いてくれるので、祖母に申し訳ない気持ちを断ち切って、どんどんゴミ袋に入れていく。その間によっちゃんは台所やお風呂場のカビを洗剤でとり、廊下にワックスまでかけてくれた。そして布団を処分してスペースの空いた押入れには、よっちゃんの見立て通りクリアケース15個がぴったり入った。

エアコンを入れながら作業をしているけれど、真夏の暑さがこたえてきたので休憩をとる。窓を開けて空気を入れ替えながら、アイスを食べることにした。

「よっちゃん。あずきバーにバニラのカップ、フルーツアイス、色々あるよ」

「あずきがいい」

「美味しいよね。おばあちゃんはおずきバーが大好きだったんだ。昨日の帰りにスーパーに寄ったときに、なんか気になって買っちゃった」

「おばあちゃんのこと、ちゃんと覚えていてくれているのね」

「うん。たぶん一生忘れないだろうな」

よっちゃんはふと静かになって目を閉じている。疲れたのだろうか。

アイスを食べ終わり、スポーツ飲料を飲みながら、作業にうつる。

休みなしでやってきた掃除も日が暮れ始める頃には終わりが見えてきた。玄関にはゴミ袋の山ができています。

すっきりした部屋を見渡すと、たくさんの祖母の思い出を捨ててしまったのに、祖母がいた頃に戻っているみたいだった。足の踏み場がある。物はすべて定位置にあり、取り出しやすく整頓されている。

「きれいになって、すごいよ。よっちゃん、魔法みたいだよ。本当に本当にありがとう」

「ううん。りーちゃんといっしょにこの家をきれいにできて本当によかったよ」

「ごはんでも食べに行こうか。私、ごちそうするよ」

「うん。私ね、お弁当を作ってきたの」

「えー。ごめん。何から何までありがとう」

よっちゃんがクーラーボックスからお弁当箱をとりだす。中身は鳥のからあげ、ぜんまいと油揚げの煮物、卵焼き、たわら型のおむすび。運動会で食べたような定番のおかずがキレイに並べられていた。「どれも全部美味しい。最高だよ。でも、あれ、なんだろう。すごくなつかしい味。おばあちゃんの味にね、すごく似ているんだよ」

振り向くと、よっちゃんの影が薄くなっていく。

笑うと猫が目を細めるように柔和な顔になる。ふっくらとしたお多福のような白いやさしい顔を見て、ようやく気づく。自分のことを常に後回しにして、心から私のためだけを考えてくれていた大切な人に、もう一度会えた奇跡に言葉がでない。

「りーちゃん、ありがとうね。おばあちゃんのこと、忘れないでいてくれて嬉しかったよ」

「なんで？ どうしてなの」

「りーちゃんがおばあちゃんに会いたっていつもお願いしてくれていたから、神様が気をきかしてくれたのね。おばあちゃん、天国ではもうぱっぱと働いているから」

「すごいよ。全然気づかなかったよ。だって、若いし、スマホ持っているし、ジーンズはいているし、全くわからなかったよ」

「サプライズや。こういうどっきりは、テレビでよく見ていたから、ぱっぱとできたよ。スマホでも何でも欲しい物は手に入るし、天国はいいところだわ。流行りのことでもね、いつもりーちゃんを見ているから、ちゃんと知ってるよ」

「おばあちゃん」

「これからも、りーちゃんや、お母さん、みんなのこと、がんばれーって見ているからね」

祖母に抱きついてわんわん泣いた。

泣きまくって顔をあげたら、祖母は部屋に置いてあったクッションに変わっていた。

両親が家に帰ってきて、ごみの山に驚き、広々とした家に感嘆している。祖母の話をしたら、母は信じなかったけれど、もしも本当なら自分も会いたかったと悔しがった。申し訳なく感じたけれど、母と祖母と三人で会えていたら、きっと遊んでしまっただけで掃除なんてしなかっただろう。たぶん祖母は天国で嘆いていたのだ。自分がいなくなった後にごみ屋敷になってしまった、自慢の我が家が悲しくて、きっとやってきてくれたのだ。

祖母の若い頃の写真を母に見せてもらおうと、よっちゃんによく似た女の子が着物姿でおすまししていた。

おばあちゃんがキレイに戻してくれた家をまたダメにしないよう、今度こそがんばるからね。だからずっと私達を見張っていてね。

キレイになった家ならば、いつでも祖母に会える気がする。大事な思い出がやっと現在進行形で明日へとつづいていく。私が会ったよっちゃんは大正生まれの祖母ヨシエだったなんて、こんな素敵な出来事が私なんかにかき起るなんて。たとえ夢や幻でもかまわない。今はおばあちゃんの偉大さに感謝して、我が家のキレイを守るために生きよう。

私はおばあちゃんのような人になりたい。今までは目指すことすらおこがましかったし、そんな生き方は今の時代に合わないと思われていたけれど、昔の人みたいに、ささやかな我が家での暮らしを、美しくできる人になっていきたい。おばあちゃん、大好きだよ。ごめんね。ありがとう。